

日仏交流 160 周年記念講演会 「～富岡市とフランスの絆に光をあてて～」

概要

日仏交流 160 周年を記念し、ブール・ド・ペアーージュ市長のナタリー・ニエゾン氏及び外務省の小林龍一郎氏を講師としてお招きし、本市国際交流員のダミアン・ロブションからもお話をさせていただき、「～富岡市とフランスの絆に光をあてて～」と題して日仏交流 160 周年記念講演会を開催しました。

フランス第 2 の都市リヨン近郊ドローム県ブール・ド・ペアーージュ市は、富岡製糸場の設立指導者ポール・ブリュナの生まれ故郷で、平成 27 年 11 月 4 日に富岡市と友好都市協定を締結しました。それをきっかけに、企画展の開催やお互いの正式訪問など、富岡市との交流が活発になってきました。

小林龍一郎氏は、平成 27 年 11 月にリヨンにて開催された富岡製糸場世界遺産登録記念大型文化事業「SOYEUX DESTINS 絹が結ぶ縁」において在リヨン領事事務所長として中心的な役割を担ったほか、富岡市とブール・ド・ペアーージュ市との友好都市協定の締結にも多大なご尽力をいただきました。

この日仏交流 160 周年記念講演会を開催することで、未来を担う子どもたち、市民、関係団体及び市職員に当市の日仏交流事業について周知し、理解を促進するとともに、国際感覚の醸成を図りました。

日時 平成 30 年 10 月 19 日（金）16 時 30 分～19 時 00 分

会場 富岡市生涯学習センター ホール

参加者 200 名

プログラム

- 16 時 30 分 開会のあいさつ（富岡市長 榎本義法）
- 16 時 35 分 ブール・ド・ペアーージュ市長（50 分、逐次通訳あり）
「富岡市の友好都市ブール・ド・ペアーージュ市について」
- 17 時 25 分 質疑応答（5 分）
- 17 時 30 分 休憩（10 分）
- 17 時 40 分 サンドアート（15 分） サンドアートデュオエミュレヌエット
- 17 時 55 分 外務省 小林龍一郎氏（40 分）
「160 年の日仏交流～絹が結ぶ縁～」
- 18 時 35 分 質疑応答（5 分）

18 時 40 分 富岡市国際交流員ダミアン・ロブション (20 分)

「富岡製糸場で日本とフランスの架け橋になって」

19 時 00 分 終了

講師プロフィール

ナタリー・ニエゾン氏【ブール・ド・ペアーージュ市長】

平成 20 年、フランス共和国オーヴェルニュ＝ローヌ＝アルプ州ドローム県ブール・ド・ペアーージュ市の市長に初当選。平成 24 年、ドローム県第 4 選挙区の国民議会議員に当選し、同年の市長選でブール・ド・ペアーージュ市長に再選。市政に集中するため、平成 29 年の国民議会選に出馬しないことを決意。平成 28 年、国民議会議員の日々の仕事を描いた「La députée du coin (地元の国民議会議員)」というエッセイを Du Seuil 出版社で出版。現地主義の市長として市民との密接な関係を大切にしている。本人曰く、市長という任期は「心の任期」だという。チームワークを好み、市民の日常生活及び市の景観の向上に全力を尽くしている。国際交流、とりわけ富岡市との関係をとっても重視している。同市出身のポール・ブリュナのおかげで、両市の関係は近年強くなり、平成 27 年 11 月 4 日に締結された友好都市協定により更に強固なものになった。平成 30 年 3 月、ブール・ド・ペアーージュ市が同市で初めて主催した「Journée du Japon (日本祭)」は大変好評だった。

小林 龍一郎【外務省 TICAD 準備事務局次長補】

岡山朝日高校、学習院大学卒業、早稲田大学大学院中退後、平成 6 年 4 月外務省入省（仏語専門職）。国際科学協力室、在フランス大使館（在リヨン在外研修）、在ギニア大使館、本省帰朝後、西欧第一課、経済局総務参事官室、外国人課、経済連携課等で勤務、在フランス大使館、在エチオピア大使館勤務を経て、平成 26 年 9 月から平成 29 年 4 月まで、在リヨン領事事務所長を務める。平成 27 年 11 月リヨンにて日仏交流行事「絹が結ぶ縁」を実施。平成 28 年 12 月 19 日、富岡市主催日仏交流講演会「富岡製糸場が日仏交流に果たす役割」講師。平成 29 年 6 月から平成 30 年 9 月まで、在カメルーン日本国大使館参事官、平成 30 年 9 月に本省帰朝し、現在 TICAD（アフリカ開発会議）準備事務局次長補。少林寺拳法 4 段、趣味多数。

ダミアン・ロブション 【富岡市国際交流員】

昭和 62 年、フランス共和国北西部サブレ・シュル・サルト市生まれ。パリの国立東洋言語文化学院で日本語を専攻。平成 22 年、上智大学に国費留学生として初来日。平成 25 年 7 月に「語学指導等を行う外国青年招致事業」（通称 JET プログラム）の参加者として富岡市国際交流員（CIR）に就任。平成 30 年 8 月、JET プログラム終了後、富岡市国際交流員として引き続き富岡製糸場で勤務。文献調査や翻訳・通訳、3 カ国語での解説案内・情報発信や

PR 活動、市内外での国際理解講座、日仏関連イベントなどを担当。TBS テレビ「所さんのニッポンの出番」、フジテレビ「フルタチさん」やNHK ワールドなどテレビ出演多数。平成 29 年 4 月から平成 30 年 6 月まで東京新聞に月 2 回「ダミアン・ロブションの BONJOUR ぐんま」というコラムを連載。平成 30 年 3 月 24 日発売の「富岡製糸場ブランドブック」でポール・ブリュナ役モデルを務めた。平成 30 年 9 月より『とみおか広報』に毎月「富岡市国際交流員の声」というコラムを連載。

講演会記録

【司会】

みなさん、こんにちは。定刻となりましたので、ただいまより、「富岡市とフランスの絆に光を当てて」と題しまして、「日仏交流 160 周年記念講演会」を開催いたします。

本日の司会を務めさせていただきます、富岡製糸場戦略課の斉藤と申します。どうぞよろしく願いいたします。

本日の通訳は、富岡市国際交流員で、富岡製糸場戦略課所属のダミアン・ロブションが行います。

途中にはサンドアートを披露いたします。どうぞ皆様、最後までお楽しみください。

それでは、まず初めに主催者であります富岡市長榎本義法からご挨拶を申し上げます。市長よろしく願いいたします。

【富岡市長】

皆様こんにちは。富岡市長の榎本です。

本日は、平日のお忙しい中、大勢の皆様にご参集いただきまして誠にありがとうございます。

主催者を代表して、一言ご挨拶申し上げます。

さて、本年は 1858 年に日仏修好通商条約が調印されてから、日仏交流 160 周年の節目の年であります。また、今から 148 年前の 1870 年、フランスのブル・ド・ペアージュ市出身のポール・ブリュナが、明治政府から、富岡製糸場設立指導者として任された時から、富岡とフランスの交流が始まりました。

富岡製糸場は、2014 年に世界遺産となり、その翌年に、外務省在リヨン領事事務所主催の富岡製糸場世界遺産登録記念大型文化事業「絹が結ぶ縁」がリヨンで開催され、同年 11 月 4 日にポール・ブリュナの故郷である、ブル・ド・ペアージュ市と友好都市協定を締結しました。

2016 年には、富岡製糸場内にて、友好都市協定締結事業「ブル・ド・ペアージュ展」を開催し、昨年 10 月には、富岡製糸場の歴史に関りの深い、フランスの博物館等から講師をお招きし、「日仏交流シンポジウム」を開催いたしました。

11月には、市民20名とフランスツアーを実施し、ブル・ド・ペアージュ市を訪問するなど、友好都市協定締結を契機に日仏交流事業を積み重ねて参りました。

本日は、その友好都市ナタリー・ニエゾン市長と、友好都市協定締結を結ぶにあたり、大変ご尽力をいただきました。現在、アフリカ開発会議準備事務局次長補、小林龍一郎氏をお招きし、講演会を開催できる運びとなりました。

また、本市、国際交流員ダミアン・ロブションからもお話をさせていただきます。

富岡製糸場から始まった、富岡とフランスの交流、そして、その縁が現在まで継続していることの素晴らしさを、みなさまに身近に感じていただき、今後も興味・関心を持っていただきたく、この講演会を開催するに至りました。

本日の講演会が、日仏交流のシンボルとしての富岡製糸場の世界的価値を改めて考える機会となり、先人たちが築いてくれた富岡市とフランスの交流が、今後も揺るぎないものとして、良い形で発展していくことをご祈念申し上げ、あいさつとさせていただきます。

本日はどうぞよろしく願いいたします。(拍手)

【司会】

ありがとうございました。

それでは本日の講演者をご紹介します。

まず、ナタリー・ニエゾンさんです。(拍手)

平成27年に富岡市と友好都市協定締結を結びました、フランス共和国のブル・ド・ペアージュの市長でございます。友好都市協定締結時においても大変ご尽力をいただきました。

また、現地主義の市長として市民との密接な関係を大切に、国際交流、とりわけ富岡市との関係もとても重視してくださっております。

続きまして、小林龍一郎さんです。(拍手)

小林さんは現在TICAD(アフリカ開発会議)準備事務局次長補としてご活躍されております。在リヨン領事事務所長在任中は、リヨンにて日仏交流事業「絹が結ぶ縁」を開催し、富岡市とブル・ド・ペアージュ市の友好都市協定を締結する際にもご尽力をいただきました。

続きまして、ダミアン・ロブションさんです。(拍手)

平成25年7月から富岡市国際交流員として富岡製糸場に勤務しております。

文献調査や翻訳・通訳、国際交流、日仏関連のイベントなどを担当しております。

本日は、以上3名の方にご講演いただきます。講師の詳細なプロフィールにつきましては、お配りさせていただいております資料をご覧くださいと思います。

それでは、最初に、ナタリー・ニエゾン市長にご講演いただきたいと思っております。

ニエゾン市長よろしく願いいたします。

マダム ナタリー ニエゾン、ジュヴザンプリ。(拍手)

【ブール・ド・ペアーージュ市長】

富岡市長、榎本様、

本日の講演会に参加できることを心より嬉しく思っております。また、ブール・ド・ペアーージュで何回もお会いしてきた小林さんにもご挨拶を申し上げたいと思います。我々ブール・ド・ペアーージュ市の訪問団にとっては、友好都市である富岡市で3日間も過ごせること、そして市長をはじめとする富岡市役所の皆さん、富岡市民の皆さんにお会いできることは、最高の喜びであり、最高の光栄でもあります。

2年前、とても楽しみにしていた初来日を果たし、富岡市に初めて訪問するチャンスに恵まれました。私の好奇心をかきたてていたのは、当然ながらフランスから遠く離れた日本という異文化に触れることです。フランス人は日本文化に対する関心がとても高いです。この初めての日本訪問は素晴らしい思い出や忘れられない出会いの溢れる旅になりました。

ご覧のように、私の一番素晴らしい思い出の一つは、ポール・ブリュナによって富岡製糸場で生まれた富岡市とブール・ド・ペアーージュ市との絆をテーマにしたとても立派な企画展です。その際、着物を着る機会がありました。私にとっては、とてもユニークで意義深い経験となりました。また、「富岡どんとまつり」のようにフランスにはない祭りに参加することもできました。明日から始まる今年の「富岡どんとまつり」に改めて参加できることを楽しみにしています。もうひとつのエピソードをご紹介します。実は、今まで一度も経験したことがなかったカラオケを体験しました。富岡市役所の皆さんと大いに盛り上がり、とても楽しい時間を過ごすことができました。

今回は、文化担当助役のベルナール・レオティエ、観光問題担当市議会議員のマガリー・ジャコブ、そして市長公室長のピエール＝アンリ・コルディエを連れて、再び富岡市を訪れることができるのは、最高の喜びです。

市長様には、これからぜひブール・ド・ペアーージュ市をご訪問して下さることを期待しています。言い換えれば、この場を借りて正式にブール・ド・ペアーージュ市にご招待させていただきたいと思います。(拍手)

ご訪問に先立ちまして、市長様をはじめ、会場の皆さんに我が市を訪れてもらえるよう、ブール・ド・ペアーージュ市のPR動画をご覧になっていただきたいと思います。

(動画上映)

以上、富岡市の友好都市ブール・ド・ペアーージュ市のPR動画でした。10,000人強の人口を有するブール・ド・ペアーージュ市は、オーヴェルニュ＝ローヌ＝アルプ州に位置しており、北にリヨン、東にアルプス山脈、そして南にプロヴァンス地方に囲まれています。

20世紀初頭、ブール・ド・ペアーージュ市はモッサンの帽子工場のおかげで、世界的な名声を博していました。フェルト帽子の製造は1930年代に停止しました。

創業当時を連想させるのは、住宅として整備されたアール・ヌーヴォー様式の旧工場跡です。私自身が住んでいるこの立派な建物は、シルク製品の製造を含む歴史的な伝統産業の証しになっています。

皆さんに一つ秘密を教えてください。ブール・ド・ペアーシュを訪れた場合、このような建物が市内に一つしかないということをご理解いただけたらと思います。私はちなみに、こちら、最上階に住んでいます。いらっしゃいましたら、呼び鈴を鳴らしてみてください。喜んで自宅に歓迎します。

ブール・ド・ペアーシュ市を流れるイゼール川沿いには、河岸通りという資源に恵まれています。この河岸通りに、とても使いやすい自転車専用レーンを整備しました。

街の中心部とネの森との直接的なアクセスを可能にしていると同時に、ブール・ド・ペアーシュ市民に快適かつ環境にやさしい移動手段を提供しています。

「ネの森」は、リヨンに次ぐオーヴェルニュ＝ローヌ＝アルプ州最大の市内森林公園です。憩いの場、そして散歩コースとしてもブール・ド・ペアーシュ市民の間でとても人気です。12ヘクタールの広さです。イゼール川まで散歩ができるほか、環境まつりなど様々なイベントの会場として使われている自然豊かな公園です。

文化やスポーツなどをテーマにした団体が豊富なブール・ド・ペアーシュ市は、まさに「住み良し」の街です。文化の分野では、ダンス、歌や芸術などを挙げることができます。また、市民のあらゆるニーズに応えるため、様々なスポーツ団体も活動しています。全仏第1リーグでプレーしている女子ハンドボールチームもあります。世界レベルで活躍している選手とプレーすることもあります。ブール・ド・ペアーシュには、とても高いレベルを誇る女子ハンドボールチームがあります。

ブール・ド・ペアーシュ市を代表するこの女子ハンドボールチームは、2014年にオープンしたとても近代的なヴェルコール総合運動施設でプレーしています。ヴェルコールという名前は、第二次世界大戦中にレジスタンス運動が活躍したヴェルコール山脈に由来しています。1200人もの観客を収容できます。

この施設では、国内はもとより、国際的なイベントの開催も可能です。その活用事例の一つとして、昨年、デビスカップで優勝したフランス人テニス選手を招待して開催したテニス大会を挙げるすることができます。その際、世界で最も名誉あるトロフィーの一つであるデビスカップを、この施設内で展示できたのは、ブール・ド・ペアーシュ市の誇りです。身体障害者のスポーツ活動にも適しています。たとえば、ハンディバスケットボールのフランス代表とアルジェリア代表との試合がこの会場で行われました。

富岡市にも優秀な女子高生ハンドボールチームがプレーしていると聞いています。これもまた両市をつなぐもう一つの大きな共通点ですね。

ブール・ド・ペアーシュはもちろん、フランス全土で女子スポーツ全般がますます発展していることはとても喜ばしいことです。毎年、ブール・ド・ペアーシュ市に元フランス

女子バスケットボール代表監督のセリーヌ・デュメルクをお招きし、フランスで最も前途有望で優秀な若手女子選手向けの合宿を企画していただいております。ブール・ド・ペアーージュ市は、女子スポーツをはじめとするスポーツ活動全般を前面に押し出しているというところを、ご理解いただけたのではないかと思います。

先ほどの動画の後半では、昨年3月17日にブール・ド・ペアーージュ市で行われた初めての「日本まつり」の映像をご覧いただきました。2000人もの来場者を数えた大成功でした。このイベントは、在リヨン領事事務所の長澤所長のご列席のもとで行われました。当日は、漫画、文学、お茶の湯、武道、盆栽、手芸やビデオゲームなど、日本文化の様々な側面に焦点を当てました。このイベントの成功を通じて、多様で洗練された日本文化がフランス人、とりわけ若い世代の間でどれだけ関心が高いかが明らかになりました。

この日本趣味は最近の風潮ではありません。19世紀末期、印象派の画家たちのインスピレーションの原点は、日本の浮世絵にありました。この日本文化の影響力は、「ジャポニスム」と呼ばれるほど絶大なものでした。

現在、富岡市美術博物館で素晴らしい企画展が行われています。展示されている富岡市出身の福沢一郎の作品は、日本とフランスの相互的な影響力を見事に物語っています。

福沢一郎は1920年代のパリの雰囲気染み込み、それを現在も見るものすべてを魅了する絵画に取り入れました。

冒頭のあいさつの中で、皆さんにお目にかかれる喜びを申し上げました。本日、皆さんの前でこうしてお話ができるのは、富岡製糸場の設立指導者に抜擢されたブール・ド・ペアーージュ市生まれのポール・ブリュナのおかげであることを忘れるわけにはいきません。ポール・ブリュナのおかげで、両市は約140年前から続く縁につながっています。

2014年6月の富岡製糸場の世界遺産登録により、両市間の永遠の絆はより一層深まりました。ポール・ブリュナだけではなく、ポール・ブリュナのお父さんもお爺さんも皆ブール・ド・ペアーージュ市出身です。2015年11月4日、前在リヨン領事事務所長の小林さんのご列席のもと、前市長の岩井さんと一緒に友好都市協定を締結しました。その際、ポール・ブリュナが生まれたとされる場所に、記念プレートの除幕式を開催しました。

ポール・ブリュナの祖父フランソワ＝ユリス・ブリュナは、小規模な製糸場を営んでいました。孫のポール・ブリュナは、製糸業に偉大な功績を残しました。実は、ポール・ブリュナの物語の始まりはさほど順調なものではありませんでした。ブール・ド・ペアーージュを後にしたのは、お父さんの企業が赤字だったからなのです。その後、リヨンに行つて、そして日本まで派遣されました。1872年10月4日、明治政府に抜擢されたポール・ブリュナは日本初の模範機械製糸工場を設立しました。

富岡製糸場の創業当初のうわさによると、富岡の皆さんは関心より恐怖の方が強かったそうです。変な風習を持つ外国人を巡るうわさが広まっていた。フランス人は生き血を飲むと言われていたのですが、本当はただのボージョレワインだったということです。このうわさは当然昔の話に過ぎません。ボージョレワインはいま日本をはじめ、全世界で

有名になりました。

ポール・ブリュナが来日するまでは、製糸は主に家族単位の農家や小さな工場でしか行われていませんでした。ポール・ブリュナは蒸気エンジンを導入することにより、日本の製糸業は産業革命の時代に入ります。こうした機械化により、一つの工場の中で数百人もの工女が一斉に作業できるようになります。1873年6月に、富岡製糸場はようやく最大の生産性に至ります。工女数は402人に達します。同年、日本全国の模範工場としての役割を果たすことになる富岡製糸場を、皇后皇太后両陛下が視察にいらっしゃいました。

皆さんがご存知のとおり、日本が推進した開国や近代化なしには、ポール・ブリュナの素晴らしい業績はなかったことでしょう。明治時代というのは、封建社会から西洋に倣った産業化への転換期と言えるでしょう。こうした社会的・政治的・文化的な激変は、やがて産業・経済・農業や貿易などといった分野での進歩をもたらしました。

幕末、それから明治時代に、フランスの君主ナポレオン三世は、フランス人の技師や軍人たちに日本に技術移転するよう促しました。1864年より、フランスは日本と本格的な歩み寄りと協力政策に乗り出します。それ以降、両国は本格的なパートナーになりました。

今年は、日仏外交関係樹立の160周年を記念しています。この一環で、9月に日本の皇太子殿下は、フランス大統領のエマニュエル・マクロン氏にヴェルサイユ宮殿での歓迎を受けました。皇太子殿下のご出張の珍しさを考えると、今回のフランス訪問では、日本がフランスとの関係を大切にしていることがよく分かりました。我々も、日仏自治体交流を通じて、年月の経過で色あせることなく続いているこうした絆の更なる強化に寄与していると思います。

ポール・ブリュナの功績は、今もなお日本で称えられつづけています。ブール・ド・ペアーージュ市民にとってはとても誇らしいことです。ポール・ブリュナの功績を一貫して記念し続ける皆さんの行動に、我々は心より感激しています。2年前、それから本日も富岡製糸場を見学させていただきました。この産業建築遺産をはじめ、ポール・ブリュナがもたらしたものを通じて発展した富岡市の歴史を大切にしている富岡市の姿勢に見習うべきだと思います。

ほとんどゼロベースからスタートしたブール・ド・ペアーージュ生まれのポール・ブリュナが、技術の最先端を走る大国日本の近代化に貢献したと考えると、とても嬉しくなります。彼の功績をここ富岡市でたたえることは、とても特別な意味があると思います。本日は、前向きな気持ちと確かな感動とともに、ポール・ブリュナの足跡をたどり続けます。ポール・ブリュナのおかげで、タイムスリップしながら、共有している歴史を生き生きとしたものにしていきます。

フランスでは次のことわざがあります。「記憶のない人間は活力のない人間。記憶のない国民は将来のない国民」。この将来を、富岡市の皆さんと一緒に築いていくことができるのは、とても幸せなことです。

スケジュールの関係で、残念ながら先日熊本市で行われた第6回日仏自治体交流会議に

出席することができませんでした。今年の分科会では、「青少年のグローバルな人材育成」というテーマが議論されました。とても重要で真剣に取り組むべき課題だと認識しています。

本日、この会場に中学生と高校生もいらっしやいます。彼らは我々の未来です。富岡でもブル・ド・ペアーージュでも、皆さんにとっても期待しています。若者には、未来への希望と楽観の使者になってもらいたいです。皆さんの中に、将来日仏友好の親善大使になったり、フランスを訪れたり、またフランスの大学に留学してくれる若者が現れることを期待しています。激動する世の中において、こうした交流は相互理解、寛容や平和を保障してくれるものです。世代間における継承が何より大切だと思います。この会場にいらっしやる年配の方も皆さんにおいては、自分の知識と世界観を全部次世代に引き継いでいくことが重要です。そして、若者にそれらをキャッチしていただき、これからさらによい世界の実現のために活かしていただくことも大切です。

若者が自分に与えられた使命を果たすまで、ブル・ド・ペアーージュ市民夫婦をご紹介します。こちらのフランス人男性と日本人女性は、私が小林さんをはじめ、富岡市民の皆さんと一緒に利用したことがある「ラ・コメディア」というレストランを経営しています。ご覧のように、日本人とフランス人の両国民の歩み寄りがブル・ド・ペアーージュで既に始まっています。

こちらの写真も意義深いです。この夫婦が「ブル・ド・ペアーージュ展」の開催期間中に富岡市を訪れたときの様子です。こちらは、2人が経営しているレストランの中の様子です。

今から、この会場にいらっしやる方も参加した人もいるかもしれませんが、富岡市民訪問団によるブル・ド・ペアーージュ訪問の写真をご覧いただきます。皆さんを暖かく迎えるのは毎回大きな喜びです。今後も多くの富岡市民の皆さんにお越しいただき、引き続きこのような写真がたくさん撮れることを期待しています。

榎本市長様、暖かくご歓迎いただき、改めて感謝申し上げます。素晴らしいおもてなしにとっても感激しています。本日から、150年以上前に、フランスの小さな町、ブル・ド・ペアーージュ市で始まった両市の共通な物語の新たなページを、御一緒に書き始めることができ、とても誇らしく思っています。

最後になりますが、とても象徴的な言葉でしめくりたいと思います。

日仏友好万歳！

そして富岡市とブル・ド・ペアーージュ市との友好、万歳！

ご清聴ありがとうございました。

【司会】

ありがとうございました。

せっかくですので、皆様から何かご質問があればお受けしたいと思います。どなたかい

らっしゃいませんか？

【質問①】

今日は貴重な話を聞かせていただきまして誠にありがとうございました。

ブール・ド・ペアージュ市のPR動画ですとか、お話を聞かせていただきまして、すごく自然が豊かで、またスポーツが盛んに行われているなど、とても魅力的な街だなと感じました。

富岡市も、とても自然豊かな街ですし、お話にもありましたがハンドボールが盛んに行われているなど、両市の共通点でもあるかと思うのですが、市長さんが実際に富岡を訪れてみて、他にも何か共通、同じような雰囲気だなとか、似ている点とか感じている点ですとか、もし富岡の良さとか感じた点がありましたら教えていただければと思います。よろしくをお願いします。

【ブール・ド・ペアージュ市長】

最初の共通点は、両市民はとてもいい人が多いという点です。

また、地理においても共通点がいくつかあります。富岡市は妙義山の麓に位置しているように、ブール・ド・ペアージュ市はヴェルコール山脈の麓に位置しています。ブール・ド・ペアージュにイゼール川が流れているのに対し、富岡市には鐺川が流れています。もちろん、富岡市のことをもっと詳しく知るには、まだまだ探検が必要です。50,000人の人口を有する富岡市に対し、ブール・ド・ペアージュは10,000人しかない小さな街ですが、街の大きさよりも、共通の課題の解決に向けて一緒に取り組んでいくという気持ちの方が大切かと思います。

ご覧頂いている写真には、奥にはヴェルコール山脈、ブール・ド・ペアージュ市街そしてイゼール川がちょうど見えます。

【司会】

ありがとうございます。本日は富岡高校の学生さんも大勢来ております。

どなたかご質問ありませんか？

【質問者】

日本に来て、フランスと違った日本の文化、いいなと思ったことは何かありますか？

【ブール・ド・ペアージュ市長】

日本とフランスは本当に大きく違うと思います。「禅」とも言える哲学、美意識の高さや環境問題への関心などといった文化は、かなり近いものがあるのではないかと思います。一方では、日本文化に潜む集団主義や日本社会の仕組みなどを高く評価しています。人や公共のものをリスペクトする日本人の心に、フランス人が見習うべきところが多いと思

ます。

【司会】

ありがとうございました。

それでは、お時間も過ぎてしまいましたので、ニエゾン市長にご講演いただきましたが、これからも両市の交流・友好が富岡製糸場の歴史のように、また絹のように長く長く続いていくよう私たちも取り組んでいきたいと考えております。

それでは皆様、ニエゾン市長に大きな拍手をお願いいたします。(拍手)

ニエゾン市長ありがとうございました。

メルシボクマダムニエゾン。

それでは、ここで、5分間ほど休憩に入りたいと思います。

こちらの時計で5分後に、お願い致します。

17時40分に開催させていただきますので、よろしくをお願いいたします。

サンドアートデュオ エミュレヌエットによるサンドアートを行いますので、時間までにお席にお戻りください。

(5分間ほど休憩)

それでは、お時間となりましたので、サンドアートデュオ エミュレヌエットによるサンドアートをご鑑賞いただきたいと思います。サンドアートを知らない方もいると思いますので、最初にお二人からお説明をいただきたいと思います。どうぞ。(拍手)

【サンドアートデュオ エミュレヌエット】

サンドアートデュオ エミュレヌエットと申します。

それでは最初に少しサンドアートについての説明をしたいと思います。

その後、こちらにあるサンドアート台を使って行いまして、砂を使ってリアルタイムで様々な絵を映し出していくパフォーマンスになります。私達の上のこのカメラで私達の手元の様子をリアルタイムでプロジェクターに映し出しております。今舞台のライトが明るいので、こんな感じでちょっと何があるか分からないのですが、サンドアートを実際に行うときは会場の証明を暗くします。もう少し暗くしてもらいます。こちらのサンドアート台の下にライトが仕込まれておりまして、逆光で絵を映し出すものになります。私達の手元にはアクリル板がありまして、このアクリル板の上に砂を毎回載せたりして手で様々な絵を描いていきます。パフォーマンスをする際には、基本的にパフォーマンスの手のみを使って、色々なものを描いていきます。砂がないところはこのように白くなっております、砂が多いところをご覧のように茶色くなっております。

砂がたくさん載っているところは暗くなりますので、砂の量をグラデーション化して、色々なものを表現しております。

この後、サンドアート 2 作品続けてご覧いただくのですが、まず最初の作品が「富岡製糸場」になります。富岡製糸場で働いていた工女さんやお蚕、後はフランス人技師のポール・ブリュナやブリュナエンジンなどが登場します。

続けて 2 作品目にご覧いただくのは、「フランスからの便り」と題して、フランスの風景ですとか、人物とか、そういうものがテーマの作品になります。

それでは 2 作品続けてご覧ください。

(サンドアートパフォーマンス)

(拍手)

【司会】

ありがとうございます。

「富岡製糸場」、「フランスからの便り」の 2 作品をご覧いただきました。エミュレヌエットのお二人どうもありがとうございました。

もう一度大きな拍手をお願いします。(拍手)

それでは、続きまして、小林龍一郎さんにご講演いただきたいと思います。

よろしく願いいたします。(拍手)

【小林龍一郎】

小林でございます。どうも皆さんこんにちは。

富岡市長、今回ありがとうございます。本日の講演会にご招待いただき大変光栄でございます。それからニエゾン市長、今日再びお会いできて非常に嬉しく思いますが、これまで一緒に進めてきたこと色々、そしてプレゼンテーション見ながら思い出してきました。どうもありがとうございます。

それから富岡の皆様、お集まりいただき本当にありがとうございます。

2 年前でございますが、製糸場の方で日本とフランス、特に日本におけるフランス人の受け入れとか、外国人の受け入れとか、日本人とフランス人はどのように調整していくかということについてお話をさせていただきました。

今日は、160 周年の日仏交流ということで講演しますので、その辺についてお話します。特に、私からは、皆さんよくご存知なので、日仏交流の歴史の中でも、160 年の前と後について特にお話したいと思います。

160 周年の前と後、それからリヨン、それからよくお話に出てきますブル・ド・ペアージュ、セルドン、ボネ絹工場など、そういったところがどういうところかについて、写真を交えながらご説明し、かつ今日のテーマにもなっています「絹が結ぶ縁」なのですが、「ソワユードスタン」というフランス語を日本語に訳しますと、「絹のように滑らかでエレガントな運命」ということです。まさにその絹が結んだ日本とフランス、それから富岡とブー

ル・ド・ペアージュ、リヨン、といったことを表現している言葉でして、これらを 3 年前リヨンでやりました「絹が結ぶ縁」という文化行事のテーマになりました。それから最後に「日仏交流の先にあるもの」、これは冒頭で申し上げた 160 年の後にあるものです。これから日仏の間はどういうようになっていくのか、日本社会、フランス社会それぞれはどのようになっていくのかというようなことを、いただいた時間の中でお話したいと思います。それではさっそく参ります。

鎖国中。鎖国と言うのはフランスの方に説明するのはなかなか難しいのですが、完全に国を閉じていたわけではありません。1639 年に南蛮船の入港禁止から 1854 年まで 185 年間一応国を閉じておりましたが、その間も海外貿易はオランダと中国、それから朝鮮という三カ国と日本は交易をしておりました。オランダを通じて、西洋の文化文明というものはもちろん入っておりまして、その中にはフランスのものもちょこちょこ入ってきているということです。この後 1858 年、日仏通商条約等を結んで、安政の開港等を行って、1859 年に横浜、函館、新潟、神戸と長崎の五つの港を一気に開きます。それから 1868 年の明治維新まで、ものがどんどん進んでいくわけです。外国の文化や外国の考え方、思想、そういったものごとがどんどん入ってくる時代です。

さて、フランスと日本の関係に関して言えば、一番古いのはどうもラペルーズ伯、この方が 1787 年に日本の近くにいらっしゃって、宗谷海峡を通過されたということで、宗谷海峡の発見者ということで、国際的にはこの人が発見したということになっていて、正式名称はラペルーズ海峡となっております。

この下がオランダ墓。これも鎖国中の話になりますが、1846 年に 2 人の水兵が日本近海でなくなりました。沖縄県になりますが、村人によって手厚く埋葬していただいたということで、右にある写真、これはオランダ墓ですが、沖縄県名護市の屋我地島というところになりますが、ここに 2 人のフランス人の方が実際に埋葬されている、お名前も全部出ています。それでなぜオランダ墓と呼ばれたかということ、最初に申し上げた鎖国中の海外貿易、唯一白人で交易が許されたのはオランダ人だったので、当時の人にとっては、白人は皆オランダ人ということで、だからオランダ墓という説と、それから沖縄の現地の言葉で、「オランダ」というのが外国人というらしくて、いずれにしても、こちらの墓に 2 人のフランス人が眠っておられるということで、2000 年に九州沖縄サミットが行われました。私も当時参加していたのですが、それぞれの大統領に沖縄周辺の由緒あるところに行きたいということで、シラック大統領がこのオランダ墓に行くことを予想していたのですが、実際は日程の都合で行けなくて、フランス大使に行っていたのですが、そういうことで色々フランス人が当時とても大事にされたということで、フランス人の皆にこのことをもって知ってもらいたいと思っております。それからこれも有名な 1855 年の蚕の病気です。スペインの蚕から発生したこの蚕の病気ですが、日本産の蚕が強いということで、リヨンでヒット商品になります。それを買いたいと思っていた人の 1 人はポール・ブリュナでした。日本産の生糸がここで、ヨーロッパの市場でハッと目に付いて、「これはなかなか

かすばらしい物だ」ということで、ヨーロッパの方も、日本で近代的な製糸場を作らなきゃならないと、それを供給して、日本でできた生糸をリヨンで絹織物にするという一連の流れをたどることができます。

それで幕末、明治になります。当然ながら日本は明治に入って殖産興業、それから富国強兵政策を進めるのですが、その過程の中でたくさんのお雇い外国人を呼びます。フランスのみならず、ドイツもありますし、イギリスもあります。特にフランスからいらっしゃった方は技術系もまた多いですが、たとえばポール・ブリュナさん。レオンス・ヴェルニーさんというのは、横須賀の造船所を造るときの技術者です。この方と中良かったのが小栗上野介という当時の勘定奉行です。幕府側にはフランスは基本的についておまして、今「西郷どん」でもやっていますように、フランスは幕府側に付きますから、そういう意味ではレオンス・ヴェルニーは当時の江戸幕府の勘定奉行小栗上野介と非常に密接な関係にありまして、お金を貸してくれて、そして技術も貸して横須賀に造船所を造ります。今でも横須賀には「ヴェルニー・小栗まつり」があって、市民に非常に愛されている方です。ボワソナードはとても有名で、彼はフランスの民法典を日本に輸入した方です。それからコワニエというのは、あまりご存知ないかもしれませんが、彼は銅山とか、銀山とかを開発された鉱山技術者です。なぜ私はこのように選んだかということ、実はコワニエ、ブリュナとヴェルニーは全員リヨン近郊の出なのです。なぜリヨン近郊の方かということ、実はリヨンというのは、フランスの中でも産業革命をリードしていたところで、リヨンで様々な技術が発達し、そこでフランスの産業革命が起きたということです。しがたって鉱山技術もそうですが、色々な職、織物技術とかそういったものがすごく発達しました。後でお話しますが、リヨンでまず最初に興ったのが、絹織物です。この絹織物はもともと中国から来た、シルクロードを使ってリヨンまで運ばれてくるのですが、その生糸でリヨンの職人が絹織物を織るわけなんです。ただ生糸を織るだけではなく、そこで色々な染色を行います。この織物に色を付けていくわけなんです。色を付けて行く過程で化学が発達していくということになります。ですから今でもリヨン市にはたくさんの工場がありまして、化学薬品の工場、薬の工場、そういうのがたくさんあります。これはすべてリヨンが当時技術開発の中心だったということから来ております。フランスと日本の関係ということ、パリと東京みたいな感じになってしまうのですが、実はリヨンとブール・ド・ペアーージュを含め、リヨンと横浜、それからもちろん富岡といったところが最も古くて本格的な日仏交流の発祥だったと言っても過言ではないということです。

さて、次。いきなり今日になります。「今日の日仏関係」ということで、極めて良好です。日本は色々な国と色々な関係を持っていますが、フランスについては本当に良好で、例えば価値観を有しています。先ほどニエゾン市長がおっしゃいましたが、自由であるとか、平等であるとか、法の支配とか、そういう社会を構成している様々な価値観を日本とフランスの間で共有しているということが一つあります。それからG7メンバー。当初、G7というのは、もともとランブイエサミットというのを、1975年にフランスのジスカール＝デ

スタン大統領が主導したのですが、当時それに参加された三木首相が、日本が当時の先進国に仲間入りしていたので、日本が呼ばれて、そういうサミットに初めて参加するという事で、日本とフランスはいわゆる G7 初期のメンバー、設立からのメンバーということですから。そういうことで、非常に仲がいいです。最近では、2013 年オランダ大統領の国賓訪日。2014 年以降、阿部総理は毎年訪仏されて、一昨日も確かにフランスに行っておられるということだと思います。フランスではマクロン大統領との間で日仏の会談が行われました。これはミッテラン大統領と天皇陛下です。ミッテラン大統領が国賓でいらっしゃる時に天皇陛下と面談しました。これは日仏 150 周年、10 年前に私はパリにいたのですが、そのときの福田総理とフィヨン首相です。それから、先ほどニエゾン市長もおっしゃいました皇太子殿下。皇太子殿下がリヨンにいらっしゃいました。フランス訪問を 9 月に行ったのですが、そのときにリヨンにありますサンテクジュペリー空港というところにお着きになって、お迎えにあがったのは当時の内務大臣のジェラルール・コロンのことです。ジェラルール・コロンのというのは、リヨンの市長を長く務められ、今の内務省を辞められて、次またリヨン市長にお戻りになるということですが、その横には今の在仏日本大使の木寺大使です。私の前の上司です。

次、リヨンとその周辺ということで、リヨンについて深く説明させていただきます。オーヴェルニュ・ローヌ・アルプ州の中心としてということで、オーヴェルニュ・ローヌ・アルプというのが、リヨンが真ん中に位置する大きな州です。リヨンはフランス第 2 の都市です。先ほど申し上げたとおり絹織物産業で栄えました。フランス産業革命の中心です。フランス第 2 の経済成長拠点であり、欧州でも GDP ベースで第 1 ということで、非常に大きな成長拠点、成長エンジンになっています。それで絹織物から化学繊維に転じたということで、絹織物で非常に発達して、長けた知識やノウハウといったものを新時代に向けて今は化学、ライフサイエンス、繊維、デジタルの方に向かっていきます。非常に大きな経済中心地になっています。もともとの名前、古代の名称はルグドゥヌム、これはラテン語で「光の街」という意味なのですが、ここからきたのが毎年 12 月に行われている「光の祭典」です。これはものすごく綺麗なのです。「光の祭典」はフランス語で「フェット・デ・ルミエール」と言うのですが、そのときには皆さんはお家の明かりを暗くして、窓枠のところに蝋燭を立てるのです。それで街中を照らすというのが伝統的な「フェット・デ・ルミエール」のお祝いの仕方です。ところで私もリヨンに 20 年前にいたのですが、そのときにはもう既にありました。もともとの起源は、14 世紀のペストの大流行の時に亡くなった人たちの魂を鎮めるために行ったということです。

それから絹織物。これはリヨン人の誇りです。織物装飾芸術博物館では後ほどご説明します「絹が結ぶ縁」も行いましたし、それから皇太子殿下も 9 月にいらっしゃったときにお立ちになられました。カニユというのは、絹を織る職人のことを言います。カニユさんは労働量が激しいので、たくさん的高カロリーのものを食べなきゃいけないということで、そこで生まれたのはブションです。ブションというのはリヨン料理のことで、リヨンとい

うのは「食の都」と言われておりまして、「ブション・リヨネ」というのは本当に有名なローカル料理です。リヨンに行かれたら必ずお試しいただきたいと思います。豚を中心にした料理です。永井荷風、「フランス物語」を書いています。「フランス物語」の中に、ある説があって、ローヌ川とソーヌ川、リヨンには二つの川が流れます。その二つの川がちょうど交わるところがリヨンで、それからローヌ川になって、地中海に流れるわけです。ローヌというおのは男性名詞で、ソーヌというのは女性名詞です。男女であって、リヨンで一緒になって、ローヌになって流れるというところで、永井荷風がそう書いていますが、永井荷風が言っているのは、ローヌ川の水面に泡が浮いて、その泡がゆっくりゆっくりと流れて行くという情景を永井荷風が「フランス物語」の中で書いています。よく川を見てみると、それとまったく同じ風景が今でもあるということで、まさに永井荷風が書いたとおりだなと思います。ちなみに永井荷風は当時横浜商事銀行という絹貿易を行っていた銀行の社員として当時リヨンにいたということです。

リヨンにはたくさんの有名な方がいらっしゃいます。エクトール・ギマールというのは、アール・ヌーヴォーの画家で有名なのですが、家のデザインとか、またパリに行かれた方は、メトロの独特な入口に気付いたと思いますが、これもエクトール・ギマールのデザインなのです。それからサンテクジュペリー、有名な「星の王子様」の作者です。リヨン空港の名前はサンテクジュペリー空港になっていますが、昔はサトラス空港と言っていたのですが、今はサンテクジュペリー空港と呼んでいます。サンテクジュペリーはリヨンで最も愛された人で、ベルクール広場にサンテクジュペリーの小さな銅像があります。それからエミール・ギメ。ギメはまさに、リヨンで化学のプロで、この人が造り出したギメブルーという青色の染料があって、この染料で莫大な財を築いた人で、その財で東洋を旅行して歩いて、東洋から様々な小物を買って帰りました。まずリヨンにできたのはリヨンのギメ美術館、そしてギメ美術館はパリにもあります。同じものですが、東洋、中国、日本、朝鮮から買って帰った様々な古物があります。今でもギメさんの孫さんがいらっしゃって、リヨン市内の市長を務めています。それからジャカール。ジョゼーフ＝マリ・ジャカールというのは非常に有名な方で、ジャカール織り、要するに絹織物のマシンを生み出しました。こういうところはフランス人がすごいところですが、絹織物を織るときに、一つのプログラムを作るわけです。自動織機です。これはコンピューターのもとになっていくのですが、そういう自動織機をジャカールが発明したということです。後はルミエール兄弟。これは有名な映画を作った人間なのです。19世紀の終わり頃に映画を作った人です。1996年にG7サミットが開かれたし、インターポールもあるし、何ととってもレジスタンス活動ですごく有名です。フランス人にとって、レジスタンスは誇りですが、我々にはちょっと分かりにくい部分があります。レジスタンス活動は彼らにとってはとても大切です。

これはリヨンです。パリからTGVで2時間です。このちょっと上にセルドンとジュジュリュウというところがあって、今ナタリー市長がおっしゃったブル・ド・ペアージュは1時間ぐらい離れています。その下にサンテティエンヌ、鉱山学校があって、技術者がたく

さんいるところです。リヨンはこのようにフランスの真ん中であって、マルセイユに行くにも、スイスに行くにも、交通の便が非常に進んでいて、昔から様々な交易交流の中心だということなんです。

これはリヨンのサンジャン教会とフルヴィエール教会、こういうのはいっぱいあります。これはルイ 14 世の像なのですが、リヨンの大学生は待ち合わせするときに、そのルイ 14 世の馬の尻尾の下と、そういう言い方で待ち合わせをします。これはソーヌ川とローヌ川です。雰囲気ですと見た瞬間分かります。これは「フェット・デ・ルミエール」で、こういうところに蝋燭を置いているのです。最近、蝋燭の数が少なくなってきたのですが、これはジャコバン広場です。ジャコバン広場もまたすごく美しいところです。

私食いしん坊なもので、食べ物ばかり撮っているのですが、これは典型的な「ブション・リヨネ」とうものです。肉の塊みたいな感じです。これは「グラトン」というのですが、豚の脂を揚げたものです。特に私は肥満体質なので絶対食べてはいけませんが、いっぱい食べてしまいます。とても美味しいです。ここに厚底の瓶があるのですが、これはいわゆる「コート・ドゥ・ローヌ」というこの地方の地ワインで、ちょっと冷やして飲みます。なぜ厚底なのか聞いてみたら、ワインを飲むとき騒ぐので、騒ぐときに瓶がこぼれないためです。これは「リ・ド・ヴォ」、牛の胸腺です。私の大好物です。大体バケツ一杯食べちゃうのです。これはチーズです。フランスでは 365 以上のチーズがあるということです。これはちなみにブルーチーズですが、ブルーチーズだけでこれだけ種類があります。いかにチーズが好きな方がマルシェに出て、もうチーズを選ぶのが大変です。種類が本当に豊富です。フランスの野菜もとても美味しいです。ちょうど 9 月ぐらいだったので、ホワイトアスパラが出ているのですが、もう皆そわそわして早く家に帰ってホワイトアスパラ食べないといけないという感じです。ホワイトアスパラを食べないと 1 年が始まらないという感じです。これはマルシェでよく見るお野菜ですが、これはザクロです。こんな感じで、リヨンは「食の都」と言われているのは、「食材の都」といってもいいです。最近亡くなった有名なシェフのポール・ボキューズはフランス料理を芸術まで高めた人ということで、この方は実はリヨンの近くにいらっしやって、リヨンの食材を使った料理を提供される方だったのです。ポール・ボキューズがフランス料理をここまで高められたのは、リヨンが中心の美味しい食材があったからだということになります。

これは「トラブール」というのですが、リヨンの古い家の中を巡る迷路のような通路網です。それで、これはリヨンにあるオテル・デュという旧病院です。今はこのように工事していて、グルメの宮殿にしようとしています。ここにも和食も入るのですが、とても楽しいイベントです。

これは「光の祭典」のときに私が最もびっくりした趣向です。これは先ほど蝋燭のあったジャコバン広場ですが、このジャコバン広場は「光の祭典」の中心です。これは要するにランプ台みたいな感じで、このランプの上に大きなクレーンがあって、シェードをつるしています。くるくる回っています。中にライトがあって、周りの建物に移し絵が表れて

います。凄まじい企画、凄まじい根性、粘り強さと言いますか。これは本当にきれいでした。こういうことにあたって、市民が楽しむのが「光の祭典」です。

ブール・ド・ペアージュ。どうもありがとうございました。市長からお話がありましたので私からは申し上げませんが、ブール・ド・ペアージュは10,000人の人口があって、スポーツが本当に盛んです。25の体育施設、ツール・ド・フランスもブール・ド・ペアージュを通ります。もちろん公立学校はあり、リヨンに次ぐ州で最大の公園「ボワ・デ・ネ」があります。その「ボワ・デ・ネ」の存在、意味というのが、実はフランスを理解する上でものすごく重要になってきますので、後ほどお話しします。

イゼール川があります。とてもきれいです。アルプスに泉があって、グルノーブルを通り、ブール・ド・ペアージュ、マルセイユ、地中海へと流れます。本当にボーっとさせるようなきれいな川です。「鎬川に似ていますね」と先ほどニエゾン市長からお話がありましたが、ブリュナが住んでいた首長館からちょうど鎬川が見えるのですが、私もあの景色を見たとき、ポール・ブリュナがブール・ド・ペアージュを思い出したのではないかなと思いました。これは市のHPからお借りしてのですが、これはツール・ド・フランスです。これは市庁舎です。とても可愛らしい市庁舎で100年以上の歴史があります。

セルドン。この富岡と、リヨンないしはブール・ド・ペアージュのこの一連の絹の流れを理解するために、絶対必要なのはこのセルドンです。アン県のセルドンというのは、ワインも有名なのですが、この器を作っていたところです。この銅器を造る職人が減って、料理人ではやはり銅は熱伝導がいいのでよく使うのですが、今はもう手に入りません。実際機械で造っているところは多いのですが、セルドン銅工場は今でも手で造っています。今は閉鎖しています。アン県議会はこれをレオープンしようということで、今一生懸命行政の方が頑張っておられるというふうに聞いております。ここにあるこの契約書というのは、これは実は本物なのですが、富岡製糸場への発注を受けたという契約書で、セルドンが銅器を造って、富岡へどんどん運んだということです。実際「Tomioka」という文字が確認できます。

これはセルドンの街です。とてもきれいです。こちらの畑はブドウ畑です。ここで採れるブドウがちょっと薄い赤のセルドンワインの材料になります。実はとても希少なのです。希少すぎてほとんど市場に出でこないのですが、リヨンでもあまり買えないし、売っていないし、パリなんか絶対にないのです。むしろ富岡というのは、リヨンの人より遥かにフランスの希少なものにアクセスできるというか、深いところにつながっているところなのです。このおじさんはゴアさんという方ですが、この工場を一生懸命守ってこられる方です。

ソワリーボネ。ソワリーボネもとても重要な場所です。ソワリーボネ自体は織物工場です。富岡製糸場と根本的に違いますが、どうもこのやり方をポール・ブリュナかあるいは誰かが見て、これとおなじようなものを日本に持ってきたのではないかとされています。非常に大きな織物工場で、リヨンは正にその絹織物でリッチになった街なのですが、

その本拠地みたいなところですよ。そこには寄宿舍もあって、絹織機など貴重な資料が残っていますし、その資料から工女の福利厚生に力を入れているということが分かります。当時リヨンに開店した高島屋からの注文書なども残っています。これは驚くのですが、これは当時の工女たちの写真です。こちらは食事を取っている様子です。食事のメニューが書いてありますが、よく見ているとかなりいいものを食べています。エネルギーが出るものをいっぱい食べています。ちょっと分かりづらいのですが、お肉とか、チキンとかが選択式になっているので、自分の好きな物をどんどん食べてくださいという感じです。決して小食ではないのです。私が喜ぶぐらい、本当に食いしん坊が食べるぐらいの量になります。それだけ大変な労力だったと思うのですが、こういった栄養管理にも大分気を使っていたということです。それから、ここはたとえば映画、観劇、リクリエーションといったものにすごく力を入れていて、それから病院と診療所のようなものがあって、富岡製糸場とよく似ていると言えます。こういう一つのシステムがあって、それを製糸場に持ってきたのではないかというふうに思います。

「絹が結ぶ縁」。これは2015年の初め頃から10カ月間準備して、11月に実施しました。本当に大変な行事で、リヨン市、ブル・ド・ペアージュ、セルドンなど色々な人を巻き込みました。これは準備委員会で大体10カ月前から準備委員会を初めて、どうするこうするというのを皆で話し合いました。これは今日もやっていただきました Emulenuett さんです。それから前夜際があって、これはブル・ド・ペアージュです。これは先ほどお話してのですが、ここはもう観光名所になっているので、皆さんブル・ド・ペアージュに行ったらぜひ見てみてください。

これは記念討論会ということで、これは先ほど申し上げた織物の自動織機を造ったジャカールさんの肖像画です。場所はリヨン商工会議所ですが、ものすごく古い建物で、ヨーロッパで二番目に古い証券取引所だったところだというふうに聞いております。そしてこの部屋は一番由緒ある「ジャカールの間」になります。とても素晴らしいところです。こちらにダミアンが写っています。これは証券取引所の天井の絵ですが、ここに中国人がいます。なぜかという、やはり絹はシルクロードから来ているので、こちらに中国人とアラブ人が交渉している様子が描かれています。これはリヨン市役所で行った記念レセプションです。非常に豪華絢爛なのです。これはリヨン庁舎、ルイ14世が確か造った建物で、その中でも一番きれいな部屋です。この間、皇太子殿下がリヨンにいらっしゃったとき、ここで晩餐会が行われたということです。これはニエゾン市長です。着物のデモンストレーションも行いましたが、とても評判でした。これは着物の着方を皆の前でデモンストレーションしていただきました。やはり和服、着物は本当に受けが良く、皆さん大好きです。こちらはリヨン織物装飾芸術博物館です。酒井先生の「花まゆ」作品をここで展示していただきました。ここに先般皇太子殿下がご訪問されました。これはいよいよ展示会ですが、こんな感じでリヨンの区役所を使って、今までの絹の歴史、絹を通した日本とフランスの歴史、それからこれからの繊維の在り方、そういった二段階で表現しました。最初

このこの青のところは今から未来に向けて、繊維産業がどのように発展していくか、そして赤い部分は今までの、お蚕さんから始まった絹の歴史をずっと説明しています。この中に富岡製糸場が正に中心重役として表現させていただきました。これはリヨンにある絹織物織機です。これを置いてもらって皆の前で実演をしてもらいました。次はセルドンの銅工場。ここは先ほど申し上げたように、一度閉じてしまったので、なかなか再開することが難しいところですが、ここにいるダミアン・アバドさんという方がアン県議会議長で、今すごく国民議会議員として頑張っていてここを応援しています。これはうちのスタッフです。皆で一生懸命やりました。

最後に、この辺で締めますが、160周年を経てきて、この後どういったものを我々が考えなければならないのか、どういったものが我々を待っているのかということ、少々考えなければなりません。日本とフランスの交流の先にあるものは何なのか。

まず最初に、フランス人が大切にしている価値観。これは私の印象です。皆さん、フランスの方が今日いらっしゃいますが、たぶん違うと言われるかもしれません。私はフランス人と付き合っって20年になりますが、フランス人と付き合っっていて、フランス人が大切にしているのはこういうことじゃないかということなのです。

一つは、彼らはすごくオリジナリティーのあるものを大切にしています。画一的意見を当然嫌います。個性を大切にします。たとえば、我々日本人だったらなんとなく春コートを着るタイミングっていつかしらとか、地下鉄に乗って私だけなんかマフラーは変だとか、そういうことついつい考えてしまうのですが、フランス人は寒かったら夏でも平気でマフラーをするということです。私はこれがすごく好きで、周囲が何を言おうとあまり気にしない、自分は自分だという考えで生きていくということです。たとえばミニテルというのが昔ありました。これはすごいオリジナリティーの塊で、今のインターネットよりもっとオリジナル。ミニテルというのは、パソコンみたいなのですが、電話器と一緒に使っています。電話器がここに付いていて、電話器を取って電話ができるのですが、そこにカードをぶちっと差し込むと、キャッシュディスプレイみたいなんです。これで支払いもできます。すごい優れ物だったのですが、いつの間にインターネットに押されて、消えていきました。こういうオリジナリティーのあるものを生み出すフランス人の柔軟さとか、発想のユニークさ、これは素晴らしいです。

そして画一的な意見を嫌うということで、今日は学生さんもいらっしゃいますが、皆と同じ意見を言うことはあまり意味がないと思います。それは皆と違う何かの切り口でどうやって自分らしさを出していけるかというところがかなり重要なのです。そういう人たちが集まって社会を作っているのはフランス社会です。それは、この人は自分と同じ意見を持っているという前提の日本ではいけなくて、人間は皆違いますから、自分とは違う意見を持っているといことを前提に話をするという癖を身につけないと、日本の画一社会でいいだろうと思っているのは大間違いで、これからどんどん外国の方もいらっしゃいますし、それから日本人の中でも様々な意見を持つ人がどんどん増えていきます、社会が多様化し

ていきます。そうなったときに、そういう社会に対応できる人間を作るためには、皆と同じことをやってれば安心するとか、皆と一緒にだから自分はいいいとか、そういう考え方はまず捨てる、ということを考えていきましょう。

2 番目、シンプルさ。とってもシンプルな物がお好きです。たとえば、極力ごみを出さないように気を付けています。エコバッグもフランスには昔からありましたし、フランスでものを買いに行くときにごろごろ押していく籠があります。それは昔からありまして、その中にもものを入れるとレジ袋は必要ないし、エコバッグですら必要ありません。それをごろごろ押して歩いて店内でものをどンドン中に入れても誰も文句言いません。要するに、シンプルに、もっと単純に、もっとシンプルな考えからもっといいことがあるのではないかという発想です。リサイクルの問題です。同じようにリサイクルも、あまり極端にぎちぎちに固めるのではなく、生きやすいように、生活しやすいようにリサイクルを考えればどうするのだろうと、一つの例をご用意したのですが、これ何か分かりますか？ピーマンみたいですね。これは街中の至るところにあります。日本だったら毎週水曜日は天然ごみだとか、ガラスは二週間に一回火曜日とか、そういうふうに決まっているのですが、これは実はワインやシャンパンなどの空き瓶を回収する箱なのです。かなり大きいです。2メートル以上ありますが、穴からどンドン空き瓶を入れて行って、がちゃんがちゃんという音がします。いっぱいになったときに車がずっと来て、上にひっかかる場所がありますが、それを持ち上げてがたがたと落としていくということなのです。これは街の景観とマッチしています。要するにごみ収集という感じではなく、街の景観とマッチしているちょっと可愛らしいということです。これも、難しくものを考えるのではなく、たとえばごみ箱をもっと可愛くしたり、そういう発想です。

3 番目、フランス人が大切にしている価値観、ナチュラルなもの。ナチュラルなものをすごく大切にしています。これは実は日本人と同じなのです。先ほどのご質問で、フランス人と日本人の共通しているものという質問がありましたが、ナチュラルなものが好きだと言えます。フランス人は BIO (ビオ)。BIO というのは無添加、無着色あるいは無農薬、そういう余計なものを使ったものではないもの、自然派農業です。BIO は今から 20 年ぐらい前からフランスで盛んで、遺伝子組み換え植物を使わない、無農薬、葉っぱが少しぐらい虫に食われてしまっても、キュウリがちょっと曲がっても、それは BIO の観点から言ったら自然に近い訳ですから。まっすぐなキュウリは並べるのは楽かもしれませんが、だいたいキュウリでも曲がっている方が美味しいです。庭で造ったキュウリも曲がっていますからね。そういうことを考えると、より自然なものって何なのと、我々は要するに自然なことは自然だったのです。原始人の時代から自然だったのに段々その自然さを何かしらの関係で変えていきながら、今の状況を作ってきたわけです。もともと人間というのは自然の塊で、要するに体の中に宇宙があるわけですから、その自然が摂取するものが自然ではないものを摂取するようになってきて、段々自然そのものがおかしくなってきた、そういう感覚です。だからリヨンというのはそういう意味でとてもフランス人のナチュラルな感性

には合ったもので、日本もどんどん入ってきています。

先ほどブール・ド・ペアージュの公園の話がありましたが、このような公園はフランスには山ほどあります。フランスでドライブしたらすぐ森に入ります。森に入ってキノコを取りに行ったり、ちょっとテーブルがあったらそこでピクニックをします。何が言いたいかというと、土日家族で集まって「じゃあどうしましょう」と言ったときに、日本の場合はどうでしょう。「ちょっとピクニックに行くか」と言う人がなかなかいないでしょう。むしろ、「だったらちょっとディズニーランド行こうか」とか「映画見に行こうか」みたいな感じで、自分の時間を潰すことを考える、自分の時間をどうやって潰すか一生懸命考えなきゃいけないのですが、私が一番びっくりしたのは、20 歳ぐらいのときにフランスに行って、土曜日に「じゃあ遊びに行くよ」と言われて、「じゃあどこへ遊びに行くか」となったときに、映画館にでも行くのかなと思ったのですが、実はバゲット 2 本とワインを 1 本、グラス三つぐらい、それとリンゴ 1 個とチーズ 2 か 3 切れ、それをバスケットの中に入れて、車に乗ってそのまま行くのです。そこで朝から晩まで色々なものをひたすら食べます。食べてちょっとお話をして疲れたら、空を見上げて、ちょっと静かにすると小鳥が鳴いている、川がサラサラ流れている、森の香りがする、森の雰囲気を感じる、そういったことにすごく喜びを彼らは感じています。何となく日本でいうところの土日の使い方がちょっと違うのですが、かといって毎日毎日ピクニックやっている訳ではありません。でも、彼らにとっての自然との距離感というのは実に心地よいのです。私達を感じているものより遥かに自然に対する接し方というのがよりストレートということを感じました。おやつが果物というのは、もちろんお菓子を食えない訳ではありません。色々なお菓子がありますが、大学に行っていたときに、学生の小腹が空いたら、自分のバッグから出してくるのは何かといったらリンゴだったりするのです。確かに自然なものを極端に愛する人たちなんだなと感じました。なので、ナチュラルなものについては、とてもフランス的な価値観の一つではないかと思います。私の意見は間違っているかもしれませんが、一応これは私の印象です。

こういうことを考えると、たとえばこんな本が出ています。「フランス人は 10 着しか服を持たない」。なぜ 10 着しか服を持たないかというと、それは 10 着しか服を持たないという意味ではなく、それは別にものにこだわるよりも、もっと別のものにこだわった方がいいじゃないという意味です。「10 着の中でシンプルに行った方がいいんじゃない。」なぜ 10 着しか服を持たないといけないかというと、それはやっぱり色々な場面で「あ〜いけない、また同じ服着ちゃった。恥ずかしいわ」とか「もう 2 度と同じ服着ないわ」とか、そうなのちやうのです。彼はそんなことを気にしません。ちょっとしたアレンジで、色をちょっと重ね着したりすることによって、全然違う風に見えますし、そもそも別に同じ服を着て何が悪いのだと、私の個性なのだという話になります。これらの本は私全部読んだわけはありませんが、これは一言で何かというと、結局フランス人的な価値観、先ほど申し上げたようにオリジナル、シンプル、ナチュラル、こういったフランス人的な価値観をもう

一度日本人が再考するチャンス、あるいは機会になるのではないかというふうに思っているのです。

私はこれまでアフリカにいたのですが、物に溢れ、それから人と人との関係が希薄になり、あるいはメールやインターネットなどがどんどん出て、他人の感情を理解できないような感じの社会、なんとなくぎすぎすする社会になったときに、なんとなく私は昭和生まれなので、昭和のころはちょっとよかったかねというふうに思っちゃったりするわけで、それはどこなのかと言ったら、なんとなくもっとナチュラルだったし、もっとシンプルだったし、こんな複雑じゃなかったと。

さらには、もう少し心地よかったのではないかなんてことを思ったりします。それを語るときに、フランス人的な価値観というものをもう一度日本人が重要視して、それをヒントに何か違う形で我々の考え方や生き方を変えて行く一つのチャンスなのではないかなと思います。特にアフリカから帰ってきたから、24 時間コンビニが開いているなんて本当にすごいことだし、確かに物があるというのは素晴らしいことなのですが、本当にこれが必要なかというふうに時々自問自答してしまう自分がここにいるわけです。そんなことよりも少々の不便を味わうというのも、これもまた生き方ですし、フランスとかに行ったら土曜日と日曜日はお店やっていませんし、だいたいスーパーマーケットはお休みになりますし、そういった中でどうやってそれでも人生がエンjoyできるのかということを考えれば、実にフランス人ではないかなと思います。

すみません、長くなってしまいました。日仏交流 160 周年と言いながら、160 周年の前と後を特に意識してお話しました。私の方は、リヨンでやったことというのは、「絹が結ぶ縁」ということで、この前提にあるのは、今日ここにいらっしゃる富岡の皆さんのご支援とご理解、それからこの絹が結ぶ歴史について大切に思ってくれている心、そういうものがあったことだと思っております。そんなことについて、私は改めて感謝申し上げ、また新市長の下で日仏関係が大きく発展していくことを記念しまして、私の講演を終了いたします。ありがとうございました。

【司会】

ありがとうございました。

小林様には、日仏交流の歴史などお話いただきました。

少しお時間押しているのですが、何かご質問ある方いらっしゃいますでしょうか？

よろしいでしょうか？

それでは、小林様にもう一度大きな拍手をお願いいたします。

それでは、最後となりますが、富岡市国際交流員のダミアン・ロブションからお話させていただきます。

ダミアンよろしくお願ひします。(拍手)

【ダミアン・ロブション】

皆さん、改めてこんにちは。富岡市国際交流員のダミアン・ロブションと申します。

それでは、始めさせていただきたいと思います。

まず、皆さんはフランスがどこにあるかよくご存知だと思うのですが、私の地元の紹介からちょっと進めさせていただきたいと思います。これは世界におけるフランスという地図なのですが、フランスと聞くと、実はフランス本土のことを連想することが多いのではないかと思います。実はフランスというのは、フランス本土がありまして、そしてその他にも海外県及び海外領土、つまりこの地図の青いところはすべてフランスの領土になります。ほとんどはフランスが昔持っていた植民地の名残ですが、たとえばこのギアナというところで衛星を飛ばすロケットの発射基地があります。このように、フランスの存在感が地球の全ての海で現れていると言っても過言ではないと思います。またフランスは皆さんのご存知のとおり、西ヨーロッパにあります。西ヨーロッパに位置しているフランスはスペイン、ドイツ、イタリアやイギリスなど、ヨーロッパの真ん中に位置しているので、色々な国と交流を進めてきている国なのです。たくさんの方から影響を受けています。それはフランスのそれぞれの地域の特色とかにも表れていると思います。フランスは EU（欧州連合）に所属している一つの大きな国です。

先ほどリヨンの話がたくさん出てきたのですが、私の地元はフランス北西部、その斜め反対に位置しています。ブルターニュという岬がこちらにあります。フランスは国、州、県そしてコミューン（市町村）がありますが、こちらはペイ・ド・ラ・ロワール州になります。ロワール川がありまして、その周りの諸州という意味です。そのさらに中に、サルト県という県があります。フランスには 101 の県がありますが、本土だけでは 95 の県があります。これらの県の中にサルト県という県があるわけですが、こちらはとてもきれいな景色になりますが、これはサルト県の県庁所在地ル・マン、日本の鈴鹿市と姉妹都市になっている自動車レースが有名な街です。こちらはル・マンの旧市街地です。実は、古い 15 世紀の家がたくさんあります。ローマ帝国時代、つまり 2000 年前ほどの時代の城壁もそのまま残っています。とても歴史の古い街です。サルト県の名物といえば、先ほど小林さんの話にもありました豚肉を使った料理がありましたが、サルト県でも我々が誇りに思っているリエットという、豚肉、豚の脂と塩コショウだけで作る大変美味しい料理があります。パンに付けて食べるととても美味しくいただけるのではないかと思います。

フランスはワインの国と言われているのですが、サルト県ではワインはそんなに有名ではありません。ただ、サルト県で作っている唯一のワインはこちらのジャニエールという白ワインです。このワインは辛口の白ワインで、魚介類、白身魚や川魚などととても相性がいいです。

先ほどは古い街並みを見たのですが、実際こういう広場もあります。フランスの各大都

市にはこういうトラム（路面電車）があります。この路面電車は住民の足になっています。高齢者から子供まで皆乗っています。工事のときは皆不満に思って、商店街の人は「なんでこんなことやっているんだ」と言っていたのですが、工事が終わったら皆に喜んでいただけだと思います。将来のことを考えると、やはりこういう施設、交通機関を設けた方がよいのではないかという意見も多いです。こういった大聖堂もあります。ゴシック様式のとても立派な協会が、ル・マンにあります。1000 年前の建物がそのまま残っていて、1 年中利用されています。ル・マンのさらに中に、こういう中世時代の街並みが残っています。たくさんの有名なフランスの映画の舞台としても使われてきました。

これは私の生まれた町です。私の故郷、サブレ・シュル・サルトというところです。こちらにサブレ城がり、そちらにサルト川があります。古い街並みは市の中心部にあります。とてもきれいな街で、私もとても誇りに思っている地元です。サブレには皆さんが知っている有名なものがあります。サブレです。鳩サブレは皆さんご存知ですね。実はその鳩サブレのサブレというクッキーはサブレで誕生したのです。お城に住んでいた貴族がルイ 14 世の宮殿に行って、そのお菓子を出したのです。ルイ 14 世の弟さんがとても気に入ってくれて、それを皆に食べさせたそうです。サブレのお土産としては外せません。

サルト県全体もそうですが、鶏が多いです。養鶏場がたくさんありますし、鶏は本当に自然の中で生息しています。こちらは先ほどと規模が全然違いますが、サブレの教会になります。その反対側、この写真を撮ったところの裏にサブレ城が坂の上にもちょうどあります。こちらはサブレ駅です。サブレには先ほどの小林さんの写真に、フィヨンという元総理大臣を務めた人がいたのですが、彼は私の故郷の市長を長年務めた人なのです。彼にはかなり政治的な力があって、TGV（いわゆるフランス版新幹線）が私の故郷のような小さな町に停まるほどの力がある人だったのです。そのおかげで、サブレにも TGV が停まるようになりました。こちらの街の中心部では、左はサブレの市役所です。19 世紀の典型的な建築です。その前に広場があり、たくさんの建物で囲まれています。こういうふうには、左は中世時代の街、15～16 世紀の街が最近リフォームされたばかりです。とてもきれいになりました。こちらの写真では、パリでも見られるような、とても統一感のある街並みです。こちらは 19 世紀に整備された、いわゆるオースマン様式の建物です。

私はなぜ富岡市の国際交流員になったかということ、それは日本には JET プログラムというものがあるからなのです。「語学指導等を行う外国青年招致事業」と言いますが、この事業のおかげで来日できました。こちらは 2013 年 8 月に群馬県庁に集まった新規採用された JET 参加者たちです。JET プログラムというと、実は大きなプログラムなのです。たとえば、2017 年に 44 カ国から 4163 名の参加者がいました。私は国際交流員という職種に属していますが、実は一番多いのは外国語指導助手です。皆さんは学校とかで、高校生たちとかはこういう青年たちと接することはあると思いますが、彼らは全体の 90% を占めています。私のような国際交流員は、自治体の国際交流の発展に貢献するような仕事をしている人は、8% です。また国籍別で見ると、アメリカとかは半分以上を占めています。その次に多いの

はカナダやイギリスなど、ほとんどが英語圏の国なのです。英語圏出身者は全体の 95%になっています。フランス出身参加者は全体の 0,5%になります。2018 年には計 26 人のフランス人国際交流員が日本全国にいました。これまで、累計 66,369 人の参加者がいました。ちなみにこちらは 2013 年 7 月ごろの写真です。この 2013 年に、在仏日本大使館を通じて採用されたフランス人国際交流員です。私の同期たちと一緒に写っています。なぜ富岡市にフランス人の国際交流員が採用されたかという、実はこの人、皆さんがよくご存知のブル・ド・ペアーージュ出身のポール・ブリュナがいたからです。これもかなり古い写真ですが、2013 年 8 月 1 日に、当時の岡野市長と面会して、その日から着任ということになります。

私の仕事の中に、様々な作業がありますが、大きな作業の一つは翻訳です。やはり日本語を外国語に翻訳することが多いです。たとえばこういう、富岡製糸場の来場者に配るパンフレット、英語版ちらしの翻訳を、私が主に担当しています。また、外国語での情報発信も必要です。富岡製糸場の観光 HP も、主に富岡製糸場関連の記事などをフランス語や英語で随時更新しています。また場内でお客さんがちゃんと順路を守れるように看板を設置しています。こちらの看板の英語、フランス語、そして実は大学で中国語も数年勉強していたので、中国語への翻訳も担当しています。また、先ほど、ブル・ド・ペアーージュ市長からブル・ド・ペアーージュ展という大きな企画展の話がありましたが、その企画展のときは、やはりブル・ド・ペアーージュ市についてネットで色々調べたりして、色々なパネルを作成しました。最初は情報をフランス語で調べて、その情報をフランス語でまとめて、それを日本語に訳していくという作業に携わりました。当時、この企画展を原田さんという別の職員と一緒に進めました。2 人で色々頑張って、フランスからの情報を集めて、ブル・ド・ペアーージュ市に関する情報を富岡市民に向けて展示会で発信しました。とてもやりがいのある仕事ですが、労力と時間のかかる仕事でもあります。その更に前の 2015 年に、「ボネとトミオカ」という資料展を富岡製糸場で開催されました。これは富岡製糸場の総合研究センターが主催した企画展ですが、アン県にあるボネ絹工場と富岡製糸場の比較を中心とした展示会です。ボネ絹工場の方に色々な資料を取り寄せていただいて、それを日本語に訳すという仕事でした。こちらは、先ほど小林さんからもお話のあった「絹が結ぶ縁」です。リヨンで作られたパネルですが、パネルの内容、富岡製糸場に関する部分の作成、そしてフランス人に受けるような写真やイラストのピックアップなど、在リヨン領事事務所の方と協力しながら内容を決めてきました。こちらは講演会の報告書です。講演会で出た発言をまとめて、それをフランス語と日本語両方で書いていくという仕事です。このように、これから参考になるような資料の作成も行っています。こちらはちなみに昨年行われた日仏シンポジウムの報告書ですが、富岡製糸場の HP からダウンロードすることができますので、ぜひダウンロードしてみてください。

また、こちらの会場にも、富岡製糸場で解説員として活躍されている方が多くいらっしゃると思いますが、私も同じように富岡製糸場を主に外国人のお客さんに案内するような

仕事もしています。だいたい、皆さんの要望に合わせてやっているのですが、約 40~50 分ぐらいの案内になります。私は英語、フランス語、ときどき日本語で案内することがあるのですが、こちら左上少し障害のある方は国会議員、先ほどの写真にも写っていたアバドさんという当時アン県議会議長だった人です。彼に富岡製糸場をフランス語で案内したり、フランス人の団体を案内したり、様々な個人や団体を案内しています。こちらはとても思い出深い案内だったのですが、今年の 1 月末にフランスの外務大臣が日本を訪れました。今年は日仏交流 160 周年という記念すべき年なので、ぜひそれを象徴している富岡製糸場を見たいということで、駐日フランス大使と一緒に外務大臣が来場されて、私が全部フランス語で案内させていただきました。自慢ではありませんが、とても喜んでもらえたそうです。富岡製糸場の価値が素晴らしいと、富岡市からの対応や案内などがすごくよかったと、大使もとても感激していたという言葉いただきました。

こちらは通訳です。先ほどまではマイクでフランス人たちにフランス語で同時通訳をしていたのですが、通訳も私の仕事の一部です。こちらは先ほどのアバドさんですが、日本のテレビ局の取材に答えているシーンです。私はメモなどをしながら、逐次で通訳をしました。こちらは、ニエゾン市長にとってはきっと懐かしい思い出であろうと思いますが、一昨年の富岡どんとまつりのオープニングセレモニーのステージイベントです。その際に、ブル・ド・ペアーージュ市長の通訳をしました。こちらは昨年の日仏シンポジウムの様子です。私はそのとき、フランス語から日本語へ、日本語からフランス語への通訳を担当しました。

また、本日はまさしく、講師を務めさせていただいていますが、こういうふうに講演を任されることもあります。主に市内などの公民館から、国際理解講座という形で、富岡市民をはじめ、県内外の方にフランスという国はどのような国なのか、どのような景色があるのか、どのようないいところがあるのか、また日本と比べてどのようなところを学ぶことができるのかなどということを講師として紹介することがあります。こちらは東京の共立女子大学で講演をしたときの様子です。

また、こういうふうに「コラムニスト」というタイトルにしたのですが、おかげさまで、東京新聞の群馬版に 2017 年 4 月から 2018 年 6 月まで毎月 2 回のペースで記事を書かせていただきました。こちらは日本語で書いた記事ですが、富岡市が行っている日仏交流の紹介、富岡とフランスの紹介、母国フランスの紹介やフランス人から見た日本の事情など、そういう内容について書いていました。ちなみにネットでも閲覧できます。「ダミアン・ロブションの BONJOUR ぐんま」で検索してみてください。また、こちらはとても誇らしく、嬉しく思っている記事です。9 月の皇太子さまの渡仏の際、朝日新聞の皇室担当記者が富岡製糸場の日仏交流に関わっている人のインタビューをしたいということで、私が紹介されました。その際にこの記事が書かれました。実は皇太子さまの写真も載っていますが、私の写真がなぜかその上に載ってしまったのです。フランス人の友達から「これって大丈夫なの？」とか、「これめったにないよ」とか色々言われたのですが、「そうなのかな」と思

って、皇太子さまと一緒に写ることができて、こういうふうに富岡製糸場のPRもできて嬉しかったです。

先ほどもお話にありましたように、皇太子さまが今回フランスに行ったときは、パリではなくリヨン入りだったのです。昨年の富岡市民がフランスに行ったときも、リヨンから入って、その後パリに行ったのです。リヨンはシルクの街です。日仏交流は160年前に実はシルクで始まりました。日本とフランスのシルクでのつながりがとても強くて、それは富岡製糸場なしでは語れないということを、皇太子さまも分かったと思います。私にとっては、こういう記事が出たのは、体験としてはとても貴重なものです。

また色々な日仏交流イベントにも参加しています。こちらは、皆さんはご存知の方もいらっしゃると思いますが、渋川市に日本シャンソン館という施設があります。やはり日本ではフランスのシャンソンはとても有名です。私の知り合いにシャンソン歌手がいますが、以前、「バニョル・エ・シャンソン」というイベントと一緒に出たことがあります。日本ではフランス車とシャンソンが有名なので、フランスのシャンソン愛好者とフランス車愛好者が集まるようなイベントです。こちらは富岡市で行われたマルシェです。そのときに電車に乗って、皆さんにワインを飲んでいただきながら、ワインやフランスの話をしました。ポスターなどに大きく取り上げていただきました。

先ほどブル・ド・ペアージュ市との交流の話がありましたが、富岡市長がブル・ド・ペアージュ市に行くときは、私は通訳とか、随行とかで行くことが多いです。

そしてジュジュリュウとの交流は、「ボネとトミオカ」という企画展の際に、フランスの関係者と密接に協力しながら仕事を進めました。また、この会場に昨年実際にボネ絹工場を見学した方もいらっしゃいますが、富岡市民に富岡製糸場が設立されたときにフランスとのつながりが強かったという事実を自分の目で確認していただくいい機会になりました。こういう事業がこれからも継続していれたらいいなと思います。

また、先ほどこの契約書の話もありましたが、セルドン銅工場の管理者はとても熱心な方で、セルドン銅工場は2010年までは実演を行っている産業観光施設として機能していたのですが、入場者が減ってしまって、閉鎖してしまいました。それ以降ずっと様々な公共団体に働き掛けても何も動かなかったそうです。しかし、富岡製糸場とのつながりが明らかになる契約書が見つかったからは、富岡市との交流、日本との交流が活発になってきました。それから、先ほどのアン県議会議長のアバドさんがそれに注目して、ぜひもっとフランス人と日本人にも注目してほしいとうことで、2020年ごろのセルドン銅工場のリニューアルオープンに向けて、アン県やオーヴェルニュ・ローヌ・アルプ州が出資しました。それは富岡製糸場との歴史的なつながり、そして富岡製糸場の世界遺産登録のおかげなのです。そういう奇跡のような話もあります。遠く離れた日本の富岡製糸場の世界遺産登録の話が来たから色々動き出したのです。それは素晴らしい奇跡に近い話だと思います。

セルドンワインの話も先ほどありましたが、セルドンワインの生産者が「絹が結ぶ縁」というワインを富岡市向けに製造しました。昨年、富岡倉庫でその披露パーティーを開き

ましたが、実にとっても美味しく飲みやすいワインです。個人的にも、ぜひ富岡市のお土産として、富岡製糸場と密接な歴史的なつながりを持つこのワインをこれからも皆さんに飲んでいただければ嬉しいです。こちらは昨年行われた「富岡製糸場のルーツを探る」というイベントのチラシです。私はその際、通訳として参加しました。その一ヶ月後に、富岡市民を募集して「富岡製糸場のルーツを巡る」という団体旅行を実施しました。参加者の皆さんに、リヨンの絹織のアトリエ、そしてアン県のセルドン銅工場、ボネ絹工場を見学していただいて、富岡製糸場との歴史的なつながりを体験していただきました。

また、富岡市が作成した映画「紅い襷～富岡製糸場物語～」の上映は日本国内でも続いています。来月の11日に横須賀で上映会が予定されています。インターネットで調べたところ、横須賀市の関係者がこの映画について次のようなことを述べていることが分かりました。「両市（富岡市と横須賀市）ともフランスの協力があつたからこそ、日本の近代化に貢献できた。映画を通じ、国際平和の大切さを感じてほしい」。「紅い襷」は実際昨年、在リヨン領事事務所内でちょっとした上映会をしたことがあります。その際に「紅い襷」のフランス語字幕版を作成しました。それから、10月27日にボネ絹工場に、先ほどお話しした日仏シンポジウムに参加された方々が集まって、富岡での経験談の他、「紅い襷」の上映会も予定されています。こちらの写真に写っているボネ絹工場の旧礼拝堂の中で上映するそうです。この建物は現在、文化会館として活用されています。パリでは今、日仏交流160周年を記念して、「ジャポニスム2018」という大きなイベント、日本が今まで海外でやってきた文化事業の中で一番大きい事業と言っても過言ではないイベントが行われています。その一環で、2月にパリ、そしてナントというフランス西部に位置している街で、「紅い襷～富岡製糸場物語～」の上映会が予定されています。こうしてフランスでも、富岡製糸場とフランスのつながり、リヨンと富岡、富岡とブル・ド・ペアージュとのつながりなどが盛りだくさん出ている映画ですので、ぜひフランス人にも富岡製糸場の価値を知っていただいて、そして富岡製糸場に来ていただければ幸いです。

こちらは皇太子さまがマクロン大統領とヴェルサイユ宮殿の晩餐会で乾杯している様子です。下の写真では、リヨン織物装飾芸術博物館を視察されている皇太子さまが写っています。本当にフランスと日本のシルクでのつながりを中心とした視察でしたので、とても素晴らしいと思います。日本とフランスのトップのレベルまでそういうことを意識しながら、日仏交流を進めている証しです。

私からの話が長くなりましたが、これで終了させていただきたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。(拍手)

【司会】

ダミアンありがとうございます。

ダミアンの国際交流員としての仕事ぶりなど、皆様にもご理解いただけたかなと思います。5年間経過しておりますが、ダミアンにはまだまだ富岡市の国際交流の発展のために、

お手伝いいただけたらと思います。ありがとうございました。(拍手)

本日は、3名の方にご講演いただきました。

この講演を通じて富岡市・富岡製糸場とフランス共和国、ブール・ド・ペアーージュ市との関係、日仏交流など皆様に少しでも知っていただき、また、興味を持っていただけたら幸いです。

皆様、ナタリー・ニエゾンさん、小林龍一郎さん、ダミアン・ロブションさんにもう一度、大きな拍手をお願いいたします。(拍手)

それでは、以上をもちまして、日仏交流 160 周年記念講演会を終了とさせていただきます。

お忙しい中、ご参加くださいまして誠にありがとうございました。

外は暗くなっておりまので、気をつけてお帰りください。

誠にありがとうございました。